

『智也子百句』を読む

高橋 実

(新潟県長岡市 76歳)

先日の句会の折、『智也子百句』の本が話題になった。

この書は俳人、故長谷川智弥子さんの百句に糸魚川の生んだ作家の利根川裕氏が自らの思いを重ねた本である。

智弥子さんは平成二十六年二月亡くなった。その年四月のある日、妻が出先で俳人長谷川智弥子さんが二月に亡くなったと聞いてきたのに驚いた。前の年十二月、立川病院内科待合室にて付き添っている娘さんと一緒に智弥子さんと偶然会って言葉を交わしたばかりだったのだ。その時、ここで会ったことは人には秘密にしてほしいと言っていた。思えば、あの時、智弥子さんは不治の病魔が救っていたのか。昭和十八年生まれであるから七十一歳ということになる。ネットで「長谷川智弥子」を引くと、偲ぶ会の句会の様子の写真が載っている。

智弥子さんは「新潟日報」俳句欄に投稿し、加藤楸邨に師事し、「寒雷」に入会。また斎藤美規主宰の「麓」創刊に参加し、昭和五十九年には新潟県俳句作家賞を受賞している。

利根川裕氏は糸魚川出身の小説家である。

この二人を結びつけたのが旧小国町（現長岡市）山野田の芸術村「おぐに山荘」である。おぐに山荘は、現在は長岡市小国町の南西の山間にひっそりと棟を寄せ合って暮らしていた小国町山野田集落に建っている。平成三年八月「おぐに山荘だより」が創刊された。発行人はこの山荘の主人である故竹石貞三郎氏である。

竹石氏は昭和七年西蒲味方村出身。明訓高校を卒業、代用教員、広告代理店勤務の後、西蒲原郡黒埼町教育委員となって、晴耕雨読の生活を楽しんでいた。平成元年ころ小国町に求めた山荘に作家の利根川裕氏を迎えて「炉辺談話の会」を組織した。以来利根川氏はここがいたく気に入ったようで、たびたびこの山荘を訪れた。利根川氏は、昭和二年糸魚川生まれ。東京大学文学部卒業後、小説「宴」で文筆生活に入り、中央公論社編

「大人からの情報発信」 74 号投稿

集者、大学講師など勤め、当時テレビ朝日系「トゥナイト」キャスターとして活躍中だった。著書も多数ある。利根川氏だけでなく、ここには竹石氏との縁でさまざまな著名人が来ていた。わたしも何度か訪問した。竹石氏は会津八一が好きで、八一の書が家中にいくつも張られてあった。

平成四年十月この書の出版を記念して利根川氏の筆で、竹石山荘の裏庭に智弥子さんの「夏帯締む鏡の中にふりむきて」の句碑が建てられた。この記念パーティーが長岡のホテルニューオータニと新潟の二か所で開かれた。長岡では利根川氏が「日々生を愛す」として講演している。

『智弥子百句』の発行所は「新潟県刈羽郡小国町大字山野田字太郎左衛門屋敷五十九番地」となっている。

長谷川智弥子さんは長岡の生まれで、小国の長谷川建設長谷川益弘氏に嫁ぎ、俳人として広く知られている。加藤楸邨の主宰する俳誌「寒雷」に所属して、早くから注目されていた。昭和五十七年、加藤楸邨夫妻が湯沢に来られた時、私も智弥子さんに誘われて一泊し、塩沢の農具市を見学した。当日智弥子さんは着物姿だった。この人の着物へのこだわりは後で知ることになった。ホテルには、一緒に石寒太氏も同行していた。智弥子さんは昭和五十九年句集『藍の風』（花神社）出版している。

その後、智弥子さんの周辺には、様々な不幸が起こった。平成二年、ご主人の益弘氏が自ら命を絶ち、智弥子さんが長谷川建設の社長になった。その悲しみにもめげず、智弥子さんは第二句集『ジープの氷柱』（平成三年 本阿弥書店）を出版された。そこには俳人斎藤美規氏のあとがきが載っている。「句集『ジープの氷柱』は長谷川さんの御主人の霊前に捧げる一集であり、また自らの鎮魂の一集でもある」と斎藤氏は書いている。その後、家の後を継いだ長男の交通事故、そして平成十九年の智弥子さん自身の交通事故、様々なことがあって、智弥子さんはあれほど愛した小国を離れ、洩海川沿いの長谷川家住宅は人手に渡った。いつか長岡駅で利根川氏と一緒にのところを見たきり、利根川氏の情報もその後聞かない。

智弥子さんの死を聞いて、娘さんに会おうとして、何回か電話したが、とうとう会えなかった。その後の様子をご主人の生まれた小国町千谷沢の人に聞くが、葬儀の連絡は地元には一切なく、御主人の眠る墓に智弥子さんの遺骨を葬ったということも聞かない

「大人からの情報発信」74号投稿

ということだった。

山野田集落は平成十六年の中越地震で全戸移転し、今は住む人がなくなった。ただ、小国支所教育支援班の管理になる「小国芸術村会館」がギャラリーとして土日のみ開館して様々な展覧会が開かれるだけになった。ここは最後に残った紙漉き集落として、かつて東京の様々な芸術家がセカンドハウスとして住まいしていたのに、今は地名として残るのみである。

今年秋の句会の折、その話を出したら、その日のうちに仲間の一人が出かけて行って句碑の周りの草を刈ってくれた。「おぐに山荘」は、屋根が壊れ、壁がむき出し、廃屋として無残な姿を晒している。この冬は屋根に積もった雪がいつ落ちてくるかと危険なため、村の人が頼み込んでようやく小屋を壊してもらったという。

『智弥子百句』の冒頭の句が[月光に傷なき裸身投げ出しぬ]と云う句であった。

その句に利根川氏は著書の中でこう解説する。

「さらさらと竹の葉が鳴っている。今宵、なよたけのかぐや姫は月に還る。天からの羽衣をまとうべく裸身となった姫は、そのままの姿を月に向かって投げ出した。地上の帝はじめ権門貴族たちの魂を揺さぶった姫の姿。そして誰からも傷つけられなかった姫の姿。

月へは還らなければならぬ。が、竹取の翁との別れが身を噛む。なにひとつ身にまとわぬ姿での月への身投げ。これは天界への捨身か、それとも他界への捨身か。その後の月界での姫の消息はわからぬが、姫はこの世の物語の中で生き続けることになる」

あの山荘のある山野田集落も、山荘の建物も、そこに集まった人たちも、時と云う大きな波に揺られ揺られて、ともども月へ還ってしまった。あの句碑もそのうち鬱蒼とした雑木の中に、一塊の石と化してゆくだろう。茫々たる年月のみが過ぎ去ってゆく。